

from を含む動詞構文の結果構文的解釈

野 島 啓 一

In this paper, it is claimed that resultative constructions should be analyzed in terms of two viewpoints: cause-based condition, result-based condition. Cause-based condition describes the on-going events in the frame of actual context. Result-based condition describes the telic events from the standpoint of the resultative state. In order to strengthen this analysis, constructions including *from*-phrase are analyzed using the result-oriented condition with special reference to their diachronic aspects.

「結果」(から/を)みる 状況密着型 全体俯瞰型

認知意味論的なアプローチを出発点にして、構文レベルで規定される「結果」の意味について、通時的観点、日英比較等の考察に基づいて *obstruct* 等の動詞を含む構文を検討する。*obstruct* , *prevent* 等の動詞が *from* を head とする表現単位(以下、*from* 句)をともなう構文(以下 *from* 句構文)である。結論として、*from* 句構文は所謂「結果構文」と主張する。更に、結果構文の中でもこの *from* 句構文は「結果」から「原因」となる出来事を関係づける特性をもつことを主張する。つまり、*She pushed the door open.* のような従来の結果構文は「結果を」みるのに対して、*from* 句構文は「結果から」みる特徴をもつことを示して、結果構文の体系的な枠組作りを認知意味論的

な角度を根拠に探る。

議論の構成を示す。最初に **from** 構文の成立を通時的に検討する。その理由は、その成立過程からこの論文でのアプローチ方法を確定するためである。更に、日本語の結果構文の比較をも考慮して、**from** 句構文の説明基準としての認知意味論的な仮説を提示する。次に、その説明基準に基づいて通常の結果構文と **from** 構文の違いが意味的・統語的な観点について説明できることを示す。最後に、この主張の意義と他の領域との関連性にふれる。

まず、**from** 句構文で使われる動詞を検討する。対象にした 23 の動詞で **OE** を語源とするのは **hinder** , **stop** , **free** , **spare** で他はラテン語に由来する。以下の表で、その動詞を一覧して示す。

調査語彙 (動 詞)	ラテン語原形	語 源	格 の 種 類	備 考
hinder		OE		hindrian
obstruct	obstruere		絶対格：対格	
prevent	pravenire			
retard	retardare	F		retarder (F) 経由
block up		OF		bloquer (F)
stop		OE		stuppeare (LL) 起源
impede	impedire		絶対格：対格 ：奪格	
delay		OF		delayer (OF) 起源
rob		OF		robber (OF) 経由
refrain		OF		refringere (L) 起源

from を含む動詞構文の結果構文的解釈

調査語彙 (動詞)	ラテン語原形	語源	格の種類	備考
free		OE		
bar		OF		barre, barrer
separate	separare	L	絶対格：対格 ：奪格	
deprive		OF		deprivare (med. L) 起源
spare		OE		spaer
save		OF		salvare (LL) 起源
check (oneself)				
rescue		OF		re+excudere (L) 起源
release		OF		relaxare (L) 起源
restrain		OF	絶対格	restingere (L) 起源
prohibit	prohibere		対格：奪格 ：与格	
distinguish	distinguere			distinguer (F) 説も並存
relieve		OF		relevare (L) 起源

OE=Old English OF=Old French LL=Late Latin L=Latin F=French

出典：A Latin Dictionary Oxford University Press

備考出典：Concise Oxford Dictionary

(1) *Nōn recūsāt quīn iudicēs.* (彼はお前が判決を下すのに反対しない。)

「拒否」を意味する *recūsō* が否定されている場合、その目的語となる結果を表す従属文 (*iudicēs*) を接続詞の *quīn* は導く。この二つの出来事を原因と結果として関係づける表現形式が英語に取り入れられる時、結果を示す部分が奪格の形で表現される。

(2) *Who kepte hire from drenchyng in the see?*

例文(2)は *Chaucer Concordance* (B.ML485) からの引用である。この時期は *from* 句以外にも *of* 句があったり、*from* 句で「人」以外の「物事」を表す名詞をとる表現が多く見られる。*Shakespeare Concordance* を調べると *from* 句を用いてかつ *Ving* 形の表現が多く見られることがわかる。以上の通時的な考察から、元来は二つの文が連結された表現形式が①単文形式の英語表現として確立して、②結果を表わしていた文は *from* 句の表現単位で表され、③その意味上の主語が英語表現では目的語で表されることで *from* 構文が成立したことがわかる。

通時的な検討から *from* 句構文は「結果」を表す表現単位をもつことがわかった。次に、従来の結果構文を再検討してその違いなどから結果構文を分析するためのアプローチ方法を探る。

(3) *The silversmith pounded the metal flat/*

**on the metal flat.*

例文(3)は典型的な結果構文とされ結果を表す形式 (*flat*) がついて目的語 (*metal*) に対する働きかけの動作 (*pound*) の結果 (*flat*) を表している。先行研究ではこの構文の特徴を動詞の意味的・統語的特性と連動させた分析がなされている。しかし、その通時的な発達の経緯からわかるように、二つの出来事が如何にして単文の形式で表現されるようになったかという視点からの検討が可能である。この *from* 句構文のアプローチ方法を探るために、日本語では二つの出来事が複合動詞を用いて表現されることを手がかりに考えてみる。

(4) 彼は小窓を押し開けた。

例文(4)では同一の対象に対する二つの行為の連続が表される。「押す」行為はその直接の結果としての「開く」状態と繋がる場合、全体の出来事をワンセットにして捉えていると解釈できる。ある出来事を原因として別の出来事をその結果として関係づけることは論理的には正しくない。何故ならば、元の出来事とは論理的な関係がない出来事が結びつく可能性があるからである。しかし、原因と解釈できる出来事と結果と解釈できる二つの出来事をひとまとまりの出来事にまとめて表現する状況を設定することは可能である。それは、話し手が眼前で起こっている出来事をそのまま報告するという設定である。つまり、「状況密着」的な認知の方法である。この「状況密着」型の認知を以下に規定する。

(5) 眼前で起こっている出来事を描写する場合、対象に関する動きは、その変化を境目にして、動きがまとまりのある出来事として完結される。

仮説(5)の要点は対象の「動き」自身はその「結果」を伴って完結されるとする出来事の捉え方にある。単文の連続による表現と違い、複合動詞で表現する場合、二つの局面を統一してみていると解釈できる。「まとめる」見方を成立される要因の一つとして二つの出来事が時間的に連続している状況がある。

日本語で「結果」に必ずしも言及しない「沸かす」のような類の動詞でも複合動詞形「沸かしすぎる」では結果的意味を含むひとまとまりの行為を表す。

(6) *お湯を沸かしすぎたが、沸かなかった。

(7) *彼らはタクシーで酒場を飲み歩いた。

一方、ある動きとその変化を境に生じる結果でひとまとまりの出来事として完結させる認知の仕方基本とする「状況密着型」に対して、二つの出来事をその生起している現場から離れて見る、「全体俯瞰型」の認知方法を以下の

ように規定する。

(8) 二つの出来事を生起している場面と切り離してみる時、「結果」の出来事から「原因」の出来事を関係づけた構造化をする。

仮説(8)では、二つの出来事を最初から認知できる全体的な状況があり、結果と特定された出来事を基準にしてその原因となる出来事を「関係化」することである。論理的にも正しい推論のステップである。

今までの考察から結果構文の分析に認知的観点から二つの仮説を導いた。次に、この仮説を基に **from** 句構文をも含めて従来から結果構文とされる表現形式が説明できることを議論する。まず、英語で所謂結果構文に分類されるものは仮説(5)の「状況密着型」の認知方法で説明できる。この「状況密着型」では二つの出来事が変化を境目にしていう認知の仕方、ひとまとまりの完結した事象に統一される。だから、時間の経過や隔たりを示す表現は、変化の境目を認知できないので相容れない。

(9) **The baby cried herself to sleep {soon, *for quite a while}.**

(10) 赤ん坊は {すぐに / *泣き疲れて}、寝た。

例文(9)から泣く動作と眠り入る結果の状態がワンセットと捉えられた表現と解釈できる。行為とその結果という従来の動詞のアスペクト的なレベルからのアプローチでは結果構文の成立を促す認知的な見方を反映した構文であると説明できない。更に、日本語では複合動詞表現を一例に語彙レベルで表せられるが、英語では結果の表現単位が形容詞、前置詞句、**particle** 等複数あり、同じ型の構文レベルで表現されている事を十分に説明できない。「同時中継型」の見方では一見、慣用的にみえる構文レベルでの結果表現単位が示す不規則性も認知の仕方からは規則的であることが説明できる。

次に **from** 構文が「全体俯瞰型」の認知の仕方に基づく結果構文であることを説明する。

(11) I prevented her from going there.

例文(11)では、「そこに行った」という結果を基準にすると「到達していない」という否定的な意味を表わす。「邪魔をした」事がその原因として関係づけられている。日本語の訳文に表れる「ない」の否定表現は「状況密着型」の見方をしているためであり、英語の「全体俯瞰型」の見方では結果の基準に至らない原因となる出来事を関係づけることで否定的な内容を表している。

(12) I prevented her going.

(13) *I prevented her from having gone.

例文(12)では「行く」行為が途中で中断したことを表す。つまり前置詞 **from** を **head** とする表現単位は結果を示す独立した構成成分であることを示している。これは先に指摘したラテン語の構文に由来している。「全体俯瞰型」では二つの出来事にまとまりをつくる要因がなくてもよい。しかし、論理的な関係づけが必要である。例文(13)では **from** 句は実現した結果を表す。その既に到達した基準に至らない出来事を原因として特定し関係づけているので意味的な矛盾を引き起こして非文法的である。

(14) [They rescued the boy] from drowning.

例文(14)でも **from** 句はこの位置以外では不可である。他の構成成分と分離している。しかし、「結果」を表す構成成分の [] と対応するレベルで文の構造に組み入れられている。唯、文相当の統語的構成成分としては動詞を **head** とする構成単位に対しては順行的に後続してこの点が例文(13)と違う。

(15) He pushed open the door.

通常の結果構文では例文(15)のように結果を示す語が動詞に後続できる。即ち、動詞を文の **head** と見た場合、左枝分かれ的な統語的構成成分になっている。**from** 句構文を叙述成分が先行する成分に従属していない順行的な統語構造とすると例文(15)はその結果を叙述する統語的成分が動詞に組み込まれた逆行的な構造と考えられる。対照比較の観点からみると、複合動詞の「泣きは

らす」が結果を叙述する成分の「はらす」を語彙レベルで取り込んでいる。一方、英語では結果を叙述する成分が形容詞等、複数の品詞にまたがる。この事実と呼応して構文レベルで結果構文が定義されることになる。

要約をする。from 句構文を「結果」から「原因」を関係づける認知的な見方を提案することで、通常の結果構文を「原因」から「結果」をひとまとめの出来事にみる認知の方法と規定し、結果構文について認知的観点から二通りのタイプ分けを主張した。

参考文献

- Borkin, A. (1984) *Problems in Form and Function*, Ablex, Norwood, NJ.
- William Croft and D.Alan Cruse. (2004) *Cognitive Linguistics*, Cambridge University Press, Oxford.
- Dixon, R.M.W. (1991) *A New Approach to English Grammar, On Semantic Principles*, Oxford University Press, Oxford.
- Goldberg, Adele. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press.
- Jackendoff, Ray S. (1990) *Semantic Structures*. MIT Press, Cambridge, MA.
- 影山太郎.(1996)『動詞意味論』くろしお出版,東京.
- Langacker, Ronald. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.2: Descriptive Application*, Stanford University Press, Stanford, CA.
- Levin, Beth. (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*, Chicago University Press.
- Lightfoot, David. (1991) *How to Set Parameters: Arguments from Language Change*, MIT Press, Cambridge, MA.
- 宮崎清孝・上野直樹.(1987)『視点』(認知科学選書1)東大出版会,東京.
- 本田啓.(2005)『アフォーダンスの認知意味論』東大出版会,東京.
- Napoli, Donna Jo. (1989) *Predication: A case study for indexing theory*, Cambridge University Press, Oxford.
- Reed, Edward.S. & Jones, R. (1982) Reasons for Realism(『直接知覚論の根拠』境敦史・河野哲也訳 劉草書房.
- Taylor, John R. (1995) *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*, Oxford University Press, Oxford.